

# ダウン症の弟と形残る思い出を

加古川市に住む写真愛好家の会社員須藤恵一さん(41)と弟で書道愛好家の克敏さん(30)が、同市野口町良野の松風ギャラリーで合同作品展を開いている。弟の克敏さんはダウン症で、生まれた直後に余命を告げられたが、命の危機を乗り越えて成人することができた。兄の恵一さんが「2人とも創作ができるうちに形に残ることをしたい」と展覧会を企画した。6月1日まで。

(斎藤 誉)

## 加古川

克敏さんはヘソの緒がスや書道を楽しんでいる。恵一は、当時の弟の状態を知ることや、内蔵が一部未熟だったことなどから、生

後すぐに医師から「2週間生きられるかどうか」と宣告されたが、一命を取りとめた。大人になった今は障害のある人らが通う「クッキーズスマイル」(平岡町二俣)で働きながら、ダン

克敏さんが書道を始めたのは6歳のころ。ひらがなやカタカナなどを覚える目的で習い始め

たという。練習するうちに、従来の文字にとらわれず、直感的に訴えかける「創作漢字」が好



## 風景写真20点と創作漢字15点

きになり、現在では作品の大半を占める。

恵一さんが写真と出会ったのは15年以上前。自宅で飼育していた魚を撮るためにカメラを購入。その後しばらく遠のいたが、約6年前、子どもと伊丹空港に出かけた際、カメラが趣味の職場の同僚と偶然出会い、誘われたのをきっかけに再び写真を撮り始めたという。

会場には、克敏さんの創作書道が約15点並ぶ。いずれも力作ぞろいで、力強い太い線と、かすれた味のある筆遣いが混在し、その時々の気持ちやイメージに合った「詩」を添えている。「螢」という作品は、旧字の「螢」を基に虫をデフォルメして丸みを帯びた造形に仕立て、詩人の故谷川俊太郎さんによる「螢」をテーマにした作品を添えた。

恵一さんの写真は、関西を中心に星や風景を撮った約20点。神戸町で撮影した夜の星の写真は、肉眼では捉えられない無数にきらめく小さな星と、横に線を描いたように見える流れ星をとらえている。

恵一さんは克敏さんの作品を「勢いよく太く書いたり、はかなくかすれたり、その時の気持ちがあるまま文字に表れているように面白い」と印象を語る。一方、克敏さんも兄の作品を「夜の写真がかっこいい」としており、お互いの創作の成果を認め合っている。

午前10時～午後5時。無料。

松風ギャラリー ☎079・420・2050

創作漢字の書道を手がける須藤克敏さん(左)と兄で風景写真を展示する恵一さん。加古川市加古川町北在家